

時間学公開講座第3回
社会の時間③

「明治のインテリ層の時間イメージに対する生物進化論の影響」

右田裕規

問い：明治後半（20世紀はじめ）の進化論ブームは、当時の人びととくにインテリ層の時間イメージに、どのような影響を与えたか。

＝とくに「ヒトを含め、現存するすべての生物のルーツをさかのぼると、同じ祖先にたどりつく」という主張（「人獣同祖説」）の影響について。

・ダーウィンの『種の起原』発表（1859年）以来、「人獣同祖説」は、従来の世界観・歴史観を否定する説として各国で大きな反響（生物学界の枠を超えた、正負の反響）



・日本の場合：丘浅次郎の進化論啓蒙書をつうじて、「人獣同祖説」の中身と思想的な意味合いが、インテリ層にも広く知られ、大きな反響

丘浅次郎：明治から昭和初期の生物学者（海鞘、ヒルの研究者）

略歴：

- ・ 1868年生まれ
- ・ 1895年に山口高等学校教授。1899年から東京高等師範学校教授
- ・ 20世紀はじめに、「人獣同祖説」にもとづいた歴史観・人間観を示した一般向けの著書やエッセイを次々に発表。代表作『進化論講話』（1904年）、『進化と人生』（1906年）。（筑波 1974など）

～思想家・批評家としても高い人気を得た生物学者の先駆

丘の啓蒙書＝当時の知識人（予備軍）に多大な影響。とくに文系のインテリ層。

大杉栄の回想（1917年）：

「たしか僕が十九か二十の時だったと思う。かねて欲しくて堪らなかつた『進化論講話』を漸く手に入れた。〔…〕一行毎に、まるで未知の、すばらしい驚異の世界が、目まぐるしい程に眼の前に展けて行く。とうとう其日の一と晩のうちに読みあげて了つた。〔…〕科学と人生。之僕等が久しく科学者に聞かんと欲して、しかも丘博士以前の殆ど誰からも遂に聞く事の出来なかつた好題目である。〔…〕博士によつて、生物学又は進化論の何たるかを知り、且つ其の生物学又は進化論から観た人生社会の真相を悟り得たものが、僕等青年の間に幾千幾万あるか知れない」（大杉1917:36-8）。

『進化論講話』の記述の具体例：

「真に地球の歴史を論ずるに当っては、到底年を単位にする様なことでは間に合わぬ。〔…〕西洋の暦には尚往々天地開闢紀元六千何百何十年などと書き入れたものがあるが、〔…〕地球の歴史は〔…各地の神話が伝えるよりもずっと〕長く、随つて生物の歴史も同じく長い時を経て来たものである」（丘1904：441－2）

「人間は猿類の一種であって、他の猿等と共同な先祖から降ったという考が初めて発表せられたときには、世間の人々から非常な攻撃を被った。〔…〕折角今まで万物の霊であったのを、急に畜生と同等な段にまで引き落そうとは実にけしからぬ説であるとの情が基礎となって、種々の方面から攻撃が起った〔…〕。我先祖は藤原の朝臣某であるとか、我兄の妻は従何位侯爵某の落胤であるとかいうて、自慢したいのが普通の人情であることを思えば、先祖は獣類で、親類は猿であると聞いて、喜ばぬのも無理ではない」（丘1904：732）。

『進化論講話』 = こうした記述がくりかえし登場する構成



当時の若年インテリがうけた、丘浅次郎の啓蒙書の影響力の所在：

1) 人間を特別な存在と見る思想を、進化論・生物学的視点から否定（儒学・国学の「特造説」否定）

2) 神や人間を始点とした旧来の歴史イメージをはるかに超える長さの時間をもって、ヒトの歴史を呈示（神話的歴史観の否定）

↳20世紀はじめの丘浅次郎の人気＝科学知の普及が、人間中心的な時間イメージを必然的に破壊することの典型例

[文献]

丘浅次郎, 1904, 『進化論講話』 開成館

大杉栄, 1917, 「丘博士の生物学的人生社会観を論ず」
『中央公論』 第32年第5号

筑波常治, 1974, 「解説」 『丘浅次郎集』 筑摩書房